満のわずかな田畑を耕作しながら，テレビ，電気機具を一通りそろえていることで，出職による送金の賜であるが，農家には20～30才台の若い男子の姿がみられず，老人が孫と嫁をかかえての農家の暮しであることが一目にしてわかる。こうした出職慣行の発生については明瞭ではないが，老人の話によると，明治以来すでにおこなわれていることは確実である。

このことに関連して考えられることは富士川の水運で，富士川が藩政初期(慶長12 1607)年，角倉了以開さく)以来明治までその水運がさかんで，明治34～5年の最盛期には川舟の数は800隻以上を数えたといわれ，沿岸の村々でこれに従事するものが多かった。ところが鉄道の開通でその水運も急激におとろえ離職転業したものが如上の出職慣行に移行したといわれている。（この点更に調査の要あり）

出職者数は明瞭でないが，その実数を現地で調査し，現住人口（15才以上）に対する比率をもとめると，平須39％・久成19.5％・寺沢15.0％・福原25.2％・松山後山35％となり，各集落について出職にでるものは3戸に1戸，または4戸に1戸の割合となっている。

⑥**全戸離村**—出職の場合は農家の経営体は存在し，出職しているものは50～60才のころになると帰村して農業に復帰するが，全戸離村の場合も多い。居宅をとざし，畑には梅などの樹木を植え，甲府などに移転する例が多い。居宅や耕地は売却することなく，将来帰村することを予期しそのままとしており，空家の分布が各集落ごとに目立っている。全戸離村についてのまとまった数値は得られないが，現地調査の結果を部落別にしめすと（本籍戸数に対する比率）平須44.0％・久成26.4％・寺沢30.0％・福原38.3％・松山後山20.0％となり，かなり高い比率をしめしている。

⑦ **中学校卒業生の動向**—中富町を中心とし，富士川流域の各町村の中学校10校の卒業生の就学就職状況をアンケートによって調査すると，就職率は30％程度で，しかもすべてが東京・甲府・静岡方面など町外に就職し，町内にとどまるものはほとんどみられない。中富町の幹部のなかにも，村内にとどまるのは『ロクなもの』でないとの考え方をもらすものもある。

⑦**出職**と称せられる離村形態は人口移動論の上からこれまでにとりあげられたことはなく，しかも出職慣行はいまもつづけられている。おそらくは世代交代を俟って漸次消滅するものと考えられるが，地域の開発上，いろいろな問題点をはらんでいる。すなわち，(1)若年労働力の不足，(2)新しい農業経営の導入欠如，(3)農業の生産性の低下，(4)家族生活や村落生活上の精神的経済的不安定性，(5)農村近代化への支障などがあげられる。

文心雕龍校本の作成

戸田浩暁

文心雕龍の本文校定に志してから，すでに20余年を経過してしまった。その間，鈴木虎雄博士の「黄叔琳本文心雕龍校勘記」を補正する意味で，博士未見の資料を中心とした「黄叔琳本文心雕龍校勘記補」を昭和26年(1951)広島大学の「支那学研究」第7冊に発表したが，その後，燉煌発見の唐代写本の写真をはじめ，多くの古板本を入手又は目睹することができ，校定の業は大いに進んだ。（その間に発表した数種の論文は，1965年2月香港大学中文学会出版の「文心雕龍研究専號」にも紹介されている。）

たまたま立正大学人文科学研究所の昭和39年度研究費を交附されたのを機会に，原稿の全面的整理を行い，こゝに「文心雕龍校本」168枚を脱稿することができた。

文心雕龍校本は，道光年13年(1833)両広節署刊の黄叔琳註・紀昀評本（粤東雙門底芸香堂承刊本）を底本とし，その本文について誤脱や衍文を訂補し或は删去して新しい本文を作ったもので，訂補し或は删去した字句については一一案語を附して訂補或は删去の理由を明らかにした。その案語は合計446条に達するが，文心雕龍五十篇に於ける内訳は下記のとおりである。

原道第一	5		誄碑第十二	19
徵聖第二	12		哀弔第十三	16
宗経第三	21		雜文第十四	10
正緯第四	9		諧隱第十五	5
辨騷第五	5		史伝第十六	16
明詩第六	9		諸子第十七	16
楽府第七	13		論説第十八	12
銓賦第八	17		詔策第十九	13
頌讚第九	12		檄移第二十	8
祝盟第十	10		封禪第二十一	9
銘箴第十一	19		章表第二十二	5

奏啓第二十三	7	夸飾第三十七	8
議対第二十四	8	事類第三十八	8
書記第二十五	12	練字第三十九	6
神思第二十六	5	隠秀第四十	7
體性第二十七	6	指瑕第四十一	2
風骨第二十八	1	養気第四十二	7
通変第二十九	6	附会第四十三	8
定勢第三十	2	総術第四十四	5
情采第三十一	7	時序第四十五	12
鎔裁第三十二	6	物色第四十六	3
声律第三十三	13	才略第四十七	12
章句第三十四	3	知音第四十八	3
麗辞第三十五	4	程器第四十九	2
比興第三十六	13	序志第五十	9

以上で本文の校定が尽されたわけではなく，なお若干未解決の問題が残るので，敢て定本と称することはさしひかえるが，上記の作業によって従来通じ難かった文心雕龍の本文もかなりの程度まで読めるようになったと信ずる。今後は，この校本を基礎にして文心雕龍の訳注をつづけてゆくつもりである。（訳注の一部は「文心雕龍訳注試稿」と題して，すでに六回にわたって立正大学漢文研究会刊「城南漢学」に発表してある。）

校定に際して使用した文心雕龍の諸本と参考書とを下に列挙する。

A　写本及び板本

1. 文心雕龍　燉煌発見唐代写本（写真）
原本　British Museum蔵
2. 文心雕龍　嘉靖19年（1540）方元禎序・汪一元校　静嘉堂文庫蔵
3. 文心雕龍　万暦7年（1579）張之象序　上海涵芬楼影印（この書は従来嘉靖本と称せられていたが，楊明照氏によって万暦本であることが証明された。）浩暁蔵
4. 文心雕龍　万暦10年（1582）原一魁序　両京遺編所収　叢書集成初編所収影印本　並浩暁蔵
5. 文心雕龍訓故　王惟俭訓故　内閣文庫蔵
6. 文心雕龍　楊升菴批点　梅慶生音註　万暦37年（1609）顧起元序　吉安刘安刊　浩暁蔵
7. 文心雕龍　楊升菴批点　梅慶生音註　天啓2年（1622）梅子庚第六次校定　金陵聚錦堂刊　浩暁蔵
8. 文心雕龍　楊升菴批点　梅慶生音註　万暦37年（1609）謝兆申跋　天啓2年（1622）梅慶生識語　浩暁蔵
9. 文心雕龍　楊升菴批点　梅慶生音註　刊年刊地並未詳　内閣文庫蔵
10. 文心雕龍　楊升菴批点　梅慶生音註　天啓6年（1626）楊若題辞　姜午生訂校　内閣文庫蔵
〔6～10の五種は同系異板である。拙稿「文心雕龍梅慶生音註本の異板について」（支那学研究第24・25号）参照〕
11. 文心雕龍　万暦40年（1612）曹学佺序　鍾惺評　内閣文庫蔵
12. 劉子文心雕龍　万暦40年（1612）曹学佺序　呉興閔繩初刻　五色套印　浩暁蔵
13. 文心雕龍　明張遂辰閲　漢魏叢書所収　浩暁蔵
14. 文心雕龍　日本尚古堂木活字本　九州大学蔵
15. 文心雕龍　享保16年（1731）日本岡白駒校正句読　浪華文海堂刊　浩暁蔵
〔筆者は本書に初刻本と改定本とがあることを明らかにした。「岡白駒の文心雕龍開板について」（支那学研究第20号）参照〕
16. 文心雕龍　黄叔琳輯注　乾隆3年（1738）黄叔琳序　乾隆6年（1741）姚培謙識語　養素堂刊　浩暁蔵
17. 文心雕龍　王謨識語　乾隆56年（1791）重鐫漢魏叢書所収　浩暁蔵
18. 文心雕龍　張松孫輯註　乾隆56年（1791）張松孫序　無窮会図書館蔵
19. 文心雕龍　黄叔琳輯注　紀昀評　道光13年（1833）両広節署刊　翰墨園蔵板　浩暁蔵
20. 文心雕龍　黄叔琳輯注　紀昀評　道光13年両広節署刊　粤東雙門底芸香堂承刊　浩暁蔵
21. 文心雕龍　光緒3年（1877）崇文書局刊　東洋文庫蔵

B　前人徴引

1. 文鏡祕府論　日本釈空海撰　弘法大師全集第3巻　立正大学図書館蔵
2. 太平御覽　宋李昉等撰　1960年中華書局刊（上海涵芬楼影印宋本複刊重印）浩暁蔵
3. 玉海　宋王応麟撰　1964年台湾華文書局刊（元後元3年慶元路儒学刊本影印）

C　参考書及び参考論文（紙幅の都合上簡略に従う。）

1. 抱経堂文集　盧文弨（1796）
2. 鍾山札記　〃　（1796）

3. 札迻　孫詒讓(1894, 1960)
4. 文心雕龍黄注補正　李詳(1909)
5. 文心雕龍注　范文瀾(1921, 1936, 1958, 1960)
6. 文心雕龍講疏　范文瀾(1925)
7. 燉煌本文心雕龍校勘記　鈴木虎雄(1926)
8. 文心雕龍札記　黄侃(1927, 1962)
9. 黄叔琳本文心雕龍校勘記　鈴木虎雄(1929)
10. 文心雕龍　莊適選註(1933, 1959)
11. 范文瀾文心雕龍注挙正　楊明照(1937)
12. 文心雕龍校釋　劉永済(1948, 1954, 1962)
13. 文心雕龍索引　岡村繁(1950)
14. 黄叔琳本文心雕龍校勘記補　戸田浩晄(1951)
15. 文心雕龍新書附通検　王利器(1951)
16. 文心雕龍范注補正　斯波六郎(1952)
17. 文心雕龍札記　斯波六郎(1953—8)
18. 文心雕龍校注　楊明照(1958)
19. 文心雕龍訳注十八篇　郭晋稀(1964)
20. 文心雕龍研究専号　饒宗頤(1965)

—1965. 7. 28—